岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１４．５．３１．

Ganto Tennis

第５１号

文責：佐々木雄介

mentality の共有

個人戦シングルス決勝。コート上を縦に吹き渡る風がいっそう強くなった。

５－２ up のサービスゲームが 40-30 の match　point になるまで、試合は一方的な展開で進んだ。しかし、ここで２回の match　point を逃し、このゲームを落としたところで、流れは完全に相手に傾いてしまったのだ。風下の第８・９ゲームは、game point すら奪うことなく５－４。続いて、風上で迎えた第１０ゲームを落とし、サービスの第１１ゲームもダブルフォールトで自滅。楽勝と思えた試合は、気がつくと５－６ down で後がなくなっていた。風下に回ったことだけが、勝利を願う上で唯一の好材料だった。そして、風上に立つ相手が、初めてサーブに難を見せた。ダブルフォールト。そして、アンダーの 2nd サーブ。決勝ではあり得ない光景だった。しかし戦況は拮抗(きっこう)したまま、デュースが繰り返される。やがて相手にとって最初の match　point が訪れた。思えば数十分前、５－２ up の match　point を握っていたのは陸だったのだ。しかし、陸はこの苦境を乗り切った、というより、相手のミスが乗り切らせてくれた。ゲームカウント６－６である。

タイブレーク。風上からのサーブの不安を思えば、最初の６ポイントを風下で戦える有利は小さくない。１点でも多く奪ってエンドを交代したいところだった。しかし、3-3 で風上のエンドへ。そして 3-4down。4-4。相手が先にリードして、陸が食い下がる展開。4-5down。苦しい。そして、とうとう 4-6down の double match point を迎え、私はと言えば、陸への慰めの言葉を探していた。そんな言葉など見つからないまま、逆クロスの長いラリーが続く。やがて相手のボールがサイドアウト。5-6down に漕ぎ着けた。しかし失点すれば終わる状況に変化はない。あと１点。しかし、それは陸にとって、あと１点取れば追いつくことと同時に、続く６ポイントを風下でプレーできることをも意味していた。そして、その１点をものにした陸は、スコアを 6-6 にして風下のエンドに辿り着いたのだ。しかし、次を落として 6-7down。私の胃には大きな穴が開き、この試合４度目の match point。凌(しの)いで 7-7。そして、どちらが取ってもおかしくないラリーの末、次の得点は陸に入った。8-7up である。陸にとっては、５－２ up の 40-30 以来の championship point だった。次の得点がどんなふうにして陸に入ったのか、今はまったく思い出せないのだ。凄い試合だった。そして、この苦境を乗り切った精神力は、陸を一回りも二回りも大きくしたように見えた。

タイブレーク 4-6down のとき、カウントを数えながら見つめていたチーム全員が、苦しさに歯を食いしばったのだ。勝利が決まった瞬間は、跳び上がって喜んだのだ。言ってみれば、岩東テニス部全員の心が、陸と同じ試合を戦い、一緒に mentality を鍛えたのだ。この経験は、プレーヤーと心を共にし、同じ気持ちになって試合を見た者だけに許される特権でもある。錦織やナダルの試合を見たからといって、こんな経験はできないのだ。

さて１・２年生。確かに今は、こんな試合はできない。しかし、押し潰されそうな緊張感の中で、ぎりぎりのプレーを強(し)いられる試合をやがて経験するのだ。それを乗り越える mentality を培(つちか)うのは、skill と physical がそのレベルになるのを待ってからでは遅い。